

氏名	竹井 大介
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博 甲第 5585 号
学位授与の日付	平成29年9月29日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	Metachronous Neoplasia and Local Recurrence after Colorectal Endoscopic Submucosal Dissection (大腸腫瘍に対する内視鏡粘膜下層剥離術後の異時多発及び局所再発に関する検討)
論文審査委員	教授 藤原俊義 教授 光延文裕 教授 柳井広之

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

大腸腫瘍に対する内視鏡的粘膜切除術(EMR)後のサーベイランスに関しては、幾つかの報告がなされている。しかし、内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)後の予後に焦点を置いた報告はまれであり、特に異時多発について検討した報告はない。今回我々は、ESD後の適切なサーベイランスを確立する目的で、腺腫性病変再発のリスク評価を行った。2008年2月から2014年7月の間、岡山大学病院で大腸ESDを受け、12か月以上の経過観察を行った116人の患者を登録し、臨床病理学的特徴を遡及的に分析した。ESD後の局所再発は2.6%(3例)と寡少であった。再治療を要した他部位再発(異時多発)は20.8%に認められ、多変量解析にて、ESDと同時治療を要した腺腫性病変数が多いほど、異時多発のリスクが有意に高いことが示された(HR: 2.54, 95%CI: 1.04–6.52, $p<0.05$)。大腸ESD後のサーベイランスを計画する際には、局所再発よりも、異時多発により注意する必要がある。特にESD時に同時治療を要した病変が多い症例は、そのリスクがより高いことを認識しておく必要がある。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、大腸腫瘍の内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)施行後の適切なサーベイランスを確立する目的で、腺腫性病変再発のリスク評価を行った後方視的観察研究である。

大腸ESDを施行された116例中、局所再発は3例2.6%と少なく、再治療を要した異時性多発病変は21例20.8%であった。単変量解析では肉眼型や病変径、同時多発病変3個以上が異時性多発と関連したが、多変量解析では同時多発病変数のみが異時多発と有意に関連した。以上より、異時多発の中央値が20ヶ月であることから、大腸ESD後のサーベイランスは20ヶ月以内に行われるべきであり、同時多発病変3個以上の場合はより注意を要すると結論している。

本研究は、大腸ESD後のサーベイランスにおいて、異時多発の高リスク群を明らかにした点が重要であり、本研究は価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。